

『源氏物語』「萎ゆ」考

——そのプラスとマイナスと——

吉海 直人

〔要旨〕「萎ゆ」は衣装の糊気が落ちることだが、継子譚ではそれが経済的不如意を象徴することで、継子苛めを読み取ることができる。一方、男主人公はヒロインの「萎え」た衣装を垣間見ること、救済願望を発動させるのである。ただし経済的不如意とは無縁の「萎え」た衣装も存在する。それはもともとやわらかな（萎（柔）装束）である。男性の場合は直衣がそれに該当し、女性の場合は下着に用いられる用例が多い。それらあつて「なよ」系の用語は、人物の美的形容と衣装の形容の混同が生じているようである。「萎え」た衣装からは、そういった情報を正しく読み取る必要がある。

〔キーワード〕萎ゆ・なよ系・継子苛め・救済願望・萎装束

一、発端（問題提起）

若紫巻の北山の垣間見場面で、光源氏は藤壺に似た紫の上を垣間見て驚く。

中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもにも似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。

（新編全集206頁）

ここで源氏の目線に沿って紫の上の衣装を見ると、「萎えたる」という言葉が目にとまる。これはどのように理解すればいいのだろうか。参考までに新編全集の頭注七を見ると、「萎えたる」は、糊気が落ちてくやくにくやくになつてゐる状態。「な

れたる」とする本文も多い」とコメントされていた⁽¹⁾。これだとややマイナス評価に思われるが、ではどうして源氏は紫の上の「萎えた」衣装に目を留めたのであろうか。「走り来たる」とあるので、動きやすい衣装ということであろうか。

これについては紫の上の父兵部卿宮も紫の上の衣装を見て、かの御移り香のいみじう艶に染みかへりたまへれば、「わかしの御匂ひや。御衣はいと萎えて」と心苦しげに思ひたり。

(248頁)

と思っているのが参考になる。ここで兵部卿がかぎつけた紫の上の匂いは、その直前に源氏に抱かれたことで付着した源氏の移り香である。そのいい匂いとは対照的に、衣装は「いと萎え」ていた。それを受けた「心苦しげ」について、新編全集の頭注五では「糊がきいてこわばった着物を着るべきなのに、着なれて柔らかいのは、常に新しく着替えさせておくだけの余裕がないからだ」と、宮は不憫に思う」と、紫の上の経済的不如意に言及している。本来ならば「萎え」ていない衣装を着用すべきなのに、それができない現在の経済状況の悪さが反映しているというわけである。ただし、だからといって父が衣装を新調した記述は見られないし、匂いと衣装のアンバランスもそれ以

上詮索されていない。父親なら娘の香の匂いかどうか判別できるはずであろう。

遡って源氏の目に写った「萎えたる着て」も同様であり、決してプラスの評価ではなかったと読めそうだ。さらに関連する箇所をもう一例あげてみたい。

やうやう起きゐて見たまふに、鈍色のこまやかなるがうち萎えたるどもを着て、

(257頁)

これは源氏が紫の上を二条院に引き取った翌朝の描写である。北山で垣間見た時とは着ている衣装が異なっている。それはその間に祖母尼君が亡くなったため、紫の上は鈍色の喪服を着用していたからである。これが連れ出された時のままでとすると、昨夜は暗くてよく見えなかったのかもしれない。ただし「萎え」ているかどうかは、衣装に触ってみればすぐわかつたはずである。そのことは前に、

手をさし入れて探りたまへれば、なよよかなる御衣に、髪はつやつやとかかりて、

(若紫巻243頁)

とあつたことから察せられる。

この「なよよか」も「萎ゆ」に類似した表現であるが、プラスに解釈されることが多い。紫の上の「萎ゆ」はマイナス評価

でいいとして、「なよよか」もマイナスだったら、すぐに着がえさせたはずである。そうしなかつたのは、「なよよか」がマイナスではなかつたからであろう。そう考えると、たとえ同根の語であっても、「萎ゆ」と「なよよか」はプラスとマイナスに使い分けられている可能性がある。果たして若紫巻における「紫の上の衣装に用いられた「萎ゆ」「なよよか」は、どのように理解すればいいのであろうか。

二、「萎ゆ」の作品別分布状況

ここで参考までに「萎ゆ」の用例を調べてみると、

萎ゆ	うつほ物語	1	落窪物語	5
	蜻蛉日記	1	枕草子	4
	源氏物語	9 (含、うち萎ゆ	1)	
	和泉式部日記	1		
萎えかかる	竹取物語	1	枕草子	1
萎えはむ	枕草子	1	源氏物語	9

とあった。全三十三例と少ないながらも、『源氏物語』に十八例(半分以上)も用いられている。また「萎ゆ」の類義語とさ

れている語に「なよなよと」・「なよびか」・「なよぶ」・「なよよか」・「なよらか」がある⁽²⁾。これも用例を調べてみたところ、

なえらか	住吉物語	2 (なよらか)
なよなよと	枕草子	1
なよびか	源氏物語	11
なよぶ	源氏物語	19 (含、なよびかかる
	びすがた	1
	なよびすぐ	1
	なよびやはら	ぐ
	なよびゆく	1)

なよよか	うつほ物語	1 (なややか)
	落窪物語	1
	源氏物語	13
	蜻蛉日記	2

なよらか 枕草子 2 源氏物語 1
 となった(便宜的にこれを「なよ」系と呼ぶ)。こちらは全六十三例中『源氏物語』に五十三例も集中していた(ただし諸本によって数に異同あり)。言い換えれば『源氏物語』が「萎ゆ」以上に「なよ」系を多用していることになる。

このうち『落窪物語』に「萎ゆ」五例とやや用例が多いのは、「萎え」た衣装が継子苛めの表象となっているからである。ただし同じく継子譚の『住吉物語』には、「なえらか」(中世語

か)二例しか見当たらない。いずれにしても上代文学には用例が見られないので(3)、「萎ゆ」は『竹取物語』が初出の平安朝語ということになる。「なよ」系についても、「なよよか」は『うつほ物語』が初出であり、「なよらか」「なよなよ」とは『枕草子』が初出、「なよびか」「なよぶ」は『源氏物語』が初出となっている(4)。これらの語は衣装以外に女性の様態や美的形容としても用いられており(女性語に近い)、「萎ゆ」のよくなマイナス要素は認めにくい。

参考までに後期物語の用例を調べたところ、

萎ゆ 花物語 1 狭衣物語 2

花桜折る少将 1

萎えばみ 浜松中納言物語 1

とりかへばや物語 1 (うち萎えばみ)

なよなよと 栄花物語 1 狭衣物語 5

夜の寢覚 5 浜松中納言物語 5

とりかへばや物語 6

なよびか 栄花物語 1 夜の寢覚 1

とりかへばや物語 2

なよぶ 狭衣物語 1 とりかへばや物語 1

なよよか 栄花物語 1 狭衣物語 3

夜の寢覚 2 浜松中納言物語 1

とりかへばや物語 3

思はぬ方に泊りする少将 1

なよらか 夜の寢覚 2 浜松中納言物語 1

となった。全用例四十八例であるが、この中では「なよなよ」との二十二例が突出している。逆に「萎ゆ」「萎えばみ」は減少している。作品としては『狭衣物語』の十一例が最多であるものの、『源氏物語』のように多用されているとはいえない。

三、「萎ゆ」の問題点

そもそも「萎ゆ」という言葉には辞書的に三つの意味がある。一つ目は力がなくなること(気持ちちが萎えること)である。これは『竹取物語』後半のかぐや姫が月に帰る場面で、警護の武士達が光を浴び、「弓矢をとりたてむとすれども、手に力もなくなりて、萎えかかりたる」(新編全集71頁)と、戦う気力を失っている。これが「萎ゆ」の初出であるものの、『竹

取物語』にはこの一例しか用いられていない（衣装の例はなし）ので除外できそうである。二つ目は植物がしおれる（しなびる）ことであり、その例として能因本『枕草子』七六段に、「葵かづらもうちなえて見ゆ」（旧全集本349頁）とあるが、使用例は少ない。三つ目が糊のきいていない衣装で、前掲の若紫巻の例などがあげられている。古い用例としては『うつほ物語』俊蔭巻で、兼雅が俊蔭の娘を発見したところに、

衣、はた、はかなき単衣の萎えたるを着たるに、顔かたちは、ただ光るやうに見ゆ。（88頁）

とある。新編全集本の頭注七には「萎え」は衣装が古くなつて糊けがなくなつたさま」とある。これは着古した単衣（マイナス）と「顔かたち」の良さ（プラス）が対照的に描かれているところである。これが若紫巻同様、男の救済願望を刺激するのであろう。また『源氏物語』橋姫巻で宇治八宮の姫君たちが、「御衣どもなど萎えばみて、御前に人もなく」（新編全集123頁）とあることもあげられる。実はこの直前に八宮の衣装も「直衣のなえはめるを着給ひて」（橋姫巻123頁）と記されていた。それを受けて新編全集の頭注一八では、「前の（宮の）直衣のなえはめる」にひびきあう。（124頁）と両者の整合性が

指摘されている。近いところで父と娘の衣装にそれぞれ「萎えばむ」が用いられているのだから、整合性が求められて当然であらう。

ついでに「なよ」系の辞書的意味を調べてみると、ほぼ二つの意味があげられていた。一つ目は衣服などが柔らかくしなやかであること、二つ目は人柄や態度がもの柔らかくで弱弱いことである（多くは女性）。その二つ（人柄と衣服）が重なる（不分明な）ことも少なくないので、全般にプラスの用法が多くなっているようだ。

さて『源氏物語』の用例の分布として、宇治十帖に「萎ゆ」及び「なよ」系の用例が多いことが指摘されている。特に八宮については五十嵐正貴氏が、

かつて春宮候補でありながら一切の栄華から見放された八宮が、仏道修行に結果する（瘦身）と、経済的不如意を示す（萎えた衣）を以て記されたこの記述は痛々しい。

と述べておられる⁵⁾。これは明らかにマイナスの意味であり、そのことは薫が姫君を垣間見た後に、「衣の音もせず、いとなよやかに心苦しうて」（橋姫巻140頁）と、姉妹が奥に引つ込む際の場面で、ことさら衣擦れの音がしないことに言及している

点にうかがわれる。「なよ」系にもマイナス要素はありそうだ。新編全集の頭注一〇では「なよよか」を「萎ゆ」と區別することなく、「着古して糊気の取れた状態」としている。それに対応する薰の「心苦し」は「いじらしい」という好意的な現代語訳になっているが、これはマイナスに訳すべきであろう。

これに関連して大修館『全訳古語辞典』の「なえはむ」項には、

「晴れ」の場合と違って、日常はやわらかな衣服の方がよいとされたようで、「なえはむ」は必ずしも非難した言い方ではない。

という興味深いコメントが記されていた。これは「萎えはむ」をあえてプラスにとらえようとしていることになる。あるいは俊蔭巻や若紫巻の例を含めて、垣間見場面には男性の救済願望によって、マイナスがプラスに転換させられているのかもしれない。

四、継子物語における「萎ゆ」

ところで紫の上の物語に継子物語的要素が含まれていること

は、継母の存在が見え隠れしていることによって容易に察せられる。もし父兵部卿宮が予定通り紫の上を自邸に引き取つていたら、それこそ継母による継子苛め物語が展開したのであろう。そう考えると、源氏による紫の上掠奪は、一面では継子苛めの展開を未然に防ぐ策だったと読むこともできる(6)。

では紫の上を継子物語として見ると、「萎ゆ」はどのように解釈できるであろうか。その前に、『落窪物語』に描写されている「萎ゆ」を検討しておきたい。『落窪物語』を見ると、継子の落窪姫君には冬になっても満足な衣装(防寒具)が与えられておらず、縫い物の褒美として、やつと北の方の古着が与えられている。

北の方、よしと思ひて、おのが着たるあやのはりわたのな
えたるを着せさせ給へば、風はただはやになるままに、い
かにせましと思ふに、すこしうれし、と思ふぞ心ちのくし
過ぎたるにや。 (『落窪物語』新大系13頁)

落窪の姫君に与えられたのは北の方お古であるから、「萎え」はそのまま古着の意味で解釈してよさそうである(7)。そのことは前に落窪の姫君の衣装を見た父親が「身なりいとあし」(12頁)といい、継母に「子どもの古ぎぬやある。着せたま

へ。」(同頁)と書いていたことからわかる。落窪の姫君の

「萎え」た衣装は、間違ひなく継子苛めの表出だったのである。

その延長として、落窪の姫君の部屋に侵入した少将は、

心のうちには、きぬどもぞなえためる、はづかしと思はん

ものぞ、と思ほしけれど、

(新大系24頁)

と、「萎え」た衣装について「はづかしと思はんものぞ」とい

う感想(氣遣い)を漏らしている。もちろん姫君自身も自覚しており、

たれならんと思ふよりも、きぬどものいとあやし、はかま

のいとわろび過たるも思ふに、ただいまも死ぬるものにも

がな、と泣くさま、

(新大系26頁)

と、少将に知られることを恥ずかしがっていた。それはさらに

別れ際に、

少将、おき給に、女のきぬを引き着せ給に、一つもなくて

いと冷たければ、一つを脱ぎすべして起きていで給ふ。女

君、いとはづかしき事かぎりなし。

(29頁)

とあるところからも察せられる。

ここに二例ある「一つ」はこのままでは意味不詳だが、二日

目の描写に、

こよひははかまもいとかうばし。はかまもきぬもひとへも
あれば例の人心ちし給て、
(37頁)

とあること、さらに落窪の姫君が継母に引き立てられる際の描写にも、

しをん色のあやのなよかなる、白き、又かの少将の脱ぎ

おきしあやのひとへ着て、髪はこのごろしもつくるひけれ

ばいとうつくしげにて、

(85頁)

とあり、「かの少将の脱ぎおきしあやのひとへ」と説明されて

いることから、「一つ」は「ひとへ(単衣)」の誤写と解釈して

おきたい。概して『落窪物語』にプラスの意味の「萎えたる」

は認められない。反面、あこぎの叔母(紀伊守の妻)からもら

った「なよよか」な衣装はプラスに用いられている。継子物語

の『落窪物語』では、「萎ゆ」と「なよよか」が見事に使い分

けられていたのである。しかも「萎ゆ」には男君の救済願望も

きちんと発露していた。

一方の『住吉物語』は、『落窪物語』とは違って姫君の経済的不如意は描かれていないので、継子苛め的な「萎ゆ」は認められない。かろうじて中将が住吉へ下向する際に、「淨衣のなえらかなる」(新大系334頁)を着用している。これについて新

大系の脚注には、「ここは初瀬詣で当初から着用して、糊がおり「なえらか」に柔らかくなったもの」(同頁)とあるが、少なくとも経済的不如意は認められない。

もう一例、娘(孫)の裳着の褒美として、

人々に引出物、さるべきやうに、し給ひける、其内に、大

納言殿には、小桂のなえらかなるを奉りたれば、あやしな
がら、肩にかけて帰り給ひぬ。(新大系344頁)

と「なえらか」な桂が大納言に渡されている。これを見た父(祖父)は「あやし」と訝しがっているのです、引き出物として中古品はふさわしくなかったことがわかる。しかし後でそれが「対の君に着せはじめし時の桂に似たり」(345頁)と気付き、「昨日、給たりし小桂の、我失ひて候しもの幼くて着せそめし桂にて侍る」(同頁)と語っている。この「小桂の古りたりつる」(同頁)は、姫君がかつて裳着の際に着用した品であり、姫君の象徴・分身として機能させられている。それは父親への愛情度試験でもあった(8)。これも古着には違いないが、それでも経済的不如意とは無縁といえる。それもあって特殊な「なえらか」という語が用いられているのかもしれない。

五、中の君周辺の「萎ゆ」

ここであらためて橋姫巻の用例に戻って考えてみたい。橋姫巻の用例(萎えはむ3、なよぶ1、なよらか1、なよなよと1、計6例)は、ほぼ八宮一家に限定使用されている。そのことは『源氏物語の鑑賞と基礎知識42宿木(後半)』(至文堂)「萎えはむ」に、

「萎えはむ」の場合、対象は衣類に限定されている。またその用法も「初音」巻で六条院を訪れた男踏歌の人々の装束や、「野分」巻に語られる明石の君のうちとけた姿の二姫以外は、すべて宇治の人々の周辺に限られている。「橋姫」巻に語られている水鳥を主題にした和歌の唱和をする八の宮一家の衣類や、薫が垣間見をした八の宮家の女の童や女房たちの装束。そして、「宿木」巻当該部周辺に、二条院の中の君付きの女房や下仕えの衣装の形容として、また「東屋」巻で浮舟を見ながら亡き大君を回顧する薫の念頭に、大君の装束として浮舟のそれと対比的に語られている。経済的な困窮を示す表現ではあるが、末摘花の周辺な

どには用いられることがないことから、八の宮家の氣風をもあらわす表現として選り取られていると考えられるだろう。
(43頁)

と述べられていた。ここで衣装にかかわる「萎えはむ」は、治十帖に用例が偏っていること、さらに八宮家に集中していることが指摘されている(9)。本来は「経済的な困窮を示す表現」であるが、ここでは「八宮家の家風」と解釈することによって、無理にマイナス要素を払拭しているようにも読める。ここに従来のマイナス要素としての「萎ゆ」への批判がうかがえる。

それに対して「なよよかなり」については同本に、「なよよかなり」の「なよ」は「萎ゆ」と同根と考えられる。『源氏物語』に二三例あるが、ほとんどが、糊気がなくなり柔らかくなった装束の形容として使われている。
〈中略〉若紫の君の「なよよかなる御衣」(若紫卷)や大君の「なよよかにをかしき御衣」(総角卷)など、見るものの親しみを込めた感情が滲み出ていると思われる。この場面も、中の君が柔らかな薄紫の着物を重ね着した様子に、匂宮は、きちんとしてやや堅苦しい六の君方と比べて、親

しみやすさや落ち着きを感じ取っている。
(39頁)

と、親しみを込めたプラス表現と分析されている。つまり継子譚などのように経済不如意を象徴した「萎ゆ」を別にすると、「萎えはむ」もプラスの意味で解釈されていることになる。

次に総角卷の用例(なよびか3、なよぶ1、なよよか1、なよよと1、計6例)では、まず大君の衣装について、「白ううつくしげになよよとして、白き御衣どものなよびかなるに、衾を押しやりて」(総角卷326頁)と「なよびか」が用いられている(上にある「なよよと」は大君の様態。病身の大君であることを斟酌しても、「なよびか」な衣装が美的に用いられていることは間違いない)。また、「なよよかにをかしき御衣、上に着せてたまつりたまひて」(総角卷250頁)は、大君が中の君に「なよよか」な衣装を着せているところだが、新編全集の頭注一〇には、「薫が中の君を探りあてたとき好感をいだくようにとの用意か」と深読みされている。「をかしき」とあること、それが薫との結婚を意識して用意された衣装だとすると、決して着古したものではあるまい。

続く宿木卷の用例(萎えはむ3、なよよか2、計5例)は、中の君の用例が中心となっている。

御しつらひなども、さばかり輝くばかり高麗、唐土の錦、綾をたち重ねたる目うつしには、世の常にうち馴れたる心地して、人々の姿も、萎えばみたるうちまじりなどして、いと静かに見まはさる。君はなよよかなる薄色どもに、撫子の細長重ねて、うち乱れたまへる御さまの、何ごともいとうるはしくことごとしきまで盛りなる人の御装ひ、何くれに思ひくらぶれど、け劣りてもおぼえず、なつかしくをかききも、心ざしのおろかならぬに恥なきなめりかし。

(宿木卷436頁)

橋姫巻と同じく、女房の衣装は「萎えば」んでいた。対照的に中の君は「なよよか」な衣装をまといっている。この「萎えばむ」(マイナス)と「なよよか」(プラス)は使い分けられているのだろう。

もつとも経済的に豊かな夕霧の六の君側と比較している匂宮にしてみれば、中の君の衣装はかなり見劣りのするものであった。ところが匂宮の目には、それが欠点どころかかえって美点として映っているように読める。それは単に中の君への愛情が深いためだけではなく、かつて光源氏が葵の上や六条御息所よりも夕顔に愛情を感じたことの繰り返しであろう。

それにしても中の君周辺の衣装は、八宮の延長として着古したものが多かった。ただ、

人々のけはひなどの、なつかしきほどに萎えばみためりしをと思ひやりたまひて、母宮の御方に参りたまひて、「よろしき設けの物どもやさぶらふ。使ふべきこと」など申したまへば、

(宿木卷439頁)

などには、女房の萎えた衣装に「なつかし」が用いられている。これなど単純にマイナス評価とはできそうもない。

だからといって匂宮は、女房の衣装を新調してやるわけでもない。さすがに薫はそれに気付いて、母女三の宮のところまで衣装を調達し、中の君の元に届けている。ここに「よろしき」(無難な)とあるので、薫が調達した衣装は中の君(主人)用ではなく女房用と考えたい。薫がすぐに行動に出ているのは、男君の救済願望というより中の君の後見人的な立場だからであろう。

こういった薫の心遣いによって、

若き人々の、御前近く仕うまつるなどをぞ、とりわきてはつくろひたつべき。下仕どもの、いたく萎えばみたりつる姿どもなどに、白き衾などにて、掲焉ならぬぞなかなかめ

やすかりける。

(宿木卷40頁)

と、中の君の女房の「萎え」た衣装の欠点は解消している。ここから言えることは、糊のきいていない「萎え」た衣装を着ていることは、紫の上と同じように中の君にとつても決して好ましい姿ではなく、生活不如意のためにそうならざるをえなかつたと読める。

六、「直衣」(萎装束)の例

ここであらためて萎(柔)装束について考察しておきたい。というのも、従来の解釈は「萎ゆ」も「なよ」系も通り一遍に「糊気が落ちて」と解釈されていたからである。しかしながら「糊気が落ちることによって糊気が落ちて」「萎え」るもの以外に、最初から(新品でも)「萎え」ているやわらかな衣装もあった。例えば「直衣」の例として、

- 1 なよよかなる直衣、しをれよいほどなる搔練の桂一襲、
(『蜻蛉日記』274頁)
- 2 例も清げなる人の、練りそしたる着て、なよよかなる直衣、太刀ひき佩き、
(同329頁)

3 大納言殿、桜の直衣のすこしなよろかなるに、濃き紫の固紋の指貫、白き御衣ども、
(『枕草子』二一段49頁)

4 御なほしなどの、いたうなえたるしもをかしう見ゆ。

(『和泉式部日記』37頁)

5 桜の直衣のやや萎えたるに、指貫の裾つ方すこしふくみて、
(『若菜上巻139頁])

6 大将は、なよよかなる御直衣に、唱歌しのびやかに笛吹きすさびつつ、待ちきこえたまへるなりけり。

(とりかへばや物語490頁)

などがあげられる。1は大納言に昇進した兼家の誇らしげな姿である。頭注には「糊気が落ちてしなやかになっている直衣」とあるが、「しをれよい」とある点、決してマイナス評価ではない。次にある「搔練の桂」などは、加工してあえてつやと柔らかさを出しているのだから、この直衣も決して使い古しや普段着ではなく新品であろう(10)。

2の遠度は道綱母の養女のところへの求婚にきているのだから、衣装にはかなり神経を使っているはずである。「なよよか」にしても「練りそしたる」にしても、やはり使い古して糊気が落ちているものではなく、精一杯めかしているはずである。3

の大納言は伊周のことである。帝の御前に参上している折の衣装であるから、それなりにおしゃれして参上していると考えてよからう。

4も敦道親王がおしゃれしている姿であるから、頭注に「着慣れて柔らかになつてゐる状態」とあるのは納得しかねる。こゝういつた萎えた直衣にマイナス要素（経済的不如意）はなく、むしろ積極的に美的な着こなしをしている（プラス評価）と見るべきである。5は夕霧の「うちとけ姿」を描写したものが、3の伊周の描写に酷似、あるいは意図的に踏まえているのかもしれない。6は権中納言が「えならず薫きしめ心ことなる御直衣姿にて参りたまへり」（490頁）とあるのに対して、今大将の方は余裕のあるくつろいだ姿で対面する場面である。

これらの例の中に、着古したもの（マイナス要素）は認めがたい。この場合、「なよ」系が用いられていれば問題なくプラスに受け取れるが、4・5は「萎ゆ」なので解釈に混乱が生じる恐れがある。

これは何も直衣だけではなく、「白き御衣どものなよよかなるに、直衣ばかりをしどけなく着なしたまひて」（帚木卷61頁）はくつろいだ光源氏の姿であるが、直衣の下に着ている下着も

萎装束であつた。それは須磨に下向した折も、

白き綾のなよよかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて、
（須磨卷20頁）

とあつて、直衣ともども「しどけな」光源氏の美的形容に用いられている。その資質は息子の夕霧にも継承されているようで、「なよびたる御衣ども脱いたまうて、心ことなるをとり重ねてたきしめたまひ」（夕霧卷475頁）は、夕霧が落葉の宮を訪ねるために着替えているところである。新編全集の頭注二九には、「糊けのとれた着物を脱ぎ替える」とあるが、それは必ずしも使い古してはなく萎装束を着ていたと見たい。また薫が宿直人に褒美で与えた狩衣一式も、

えならぬ白き綾の御衣のなよよといひ知らず匂へるをうつし着て、
（橋姫卷152頁）

であつたが、これもお古などではあるまい。

ただし『うつほ物語』の中に、

八つ九つばかりなる男子、髪もよほるばかりにて、搔練の濃き桂一襲、桜の直衣のいたう萎れ綻びたるを着て、

（桜の上上巻410頁）

とある直衣は、頭注五に「経済的困窮の状況を示す」とある。この「萎れ」は特殊だが、本来直衣は童が着用するものではないので、マイナスの意味に解釈して問題なからう。こうなると八宮の「直衣のなよよかなるを着給ひて」（橋姫巻123頁）にしても、プラスの解釈も可能であつた。どうやら『源氏物語』の「萎ゆ」は、これまで一方的にマイナスに受け取られていたために、解釈が混乱していたようである。今後は「萎装束」という観点から再検討すべきであろう。

七、女性の萎装束

男性だけでなく女性の衣装の中にも、プラス要素の例が少なくない。例えば『うつほ物語』棧の上巻の、

いとなよよかなる桂に、柳の織物の薄き織物重ねて着て居たまへり。
(427頁)

は、兼雅が妾の小宰相の君を自邸に呼び寄せた場面だが、この時小宰相は精一杯の晴れ着を身につけているはずである。となると桂の「なよよか」も着古したものでなく、萎装束と見るべきであろう。原則として『うつほ物語』では、マイナスの「萎

え」とプラスの「なよ」系が使い分けられているようである。それに対して『源氏物語』では明確な使い分けは認められない。むしろ、

白き袷、薄色のなよよかなるを重ねて、はなやかならぬ姿、いとらうたげにあえかなる心地して、
(夕顔巻157頁)

などはややマイナス要素を含みながらも、源氏はその夕顔を美的に評価しており、この辺りに「なよ」系の二重構造が看取される。ただし「なよ」系はプラス評価が多く、紫の上についても、

紅はかうなつかしきもありけりと見ゆるに、無紋の桜の細長なよよかに着なして、
(末摘花巻305頁)

とある。これは二条院に引き取られた後だから、もはや経済的困難を読み取る必要はあるまい。また明石の君にしても、

白き衣どものなよよかなるをあまた着て、ながめあたる様体、頭つき、後手など、限りなき人と聞こゆともかうこそはおはすらめと人々も見る。
(薄雲巻432頁)

とある。富を象徴する明石一族であるから、これも着古した衣装とは考えにくい。

なお『枕草子』の、

白き単衣、なよらかなるに、袴よきほどにて、紫苑の衣の、いとあてやかなるをひきかけ、 (一八一段318頁)

は病気の女性の描写であるが、これも装束の下着であろう。それを「よき」「あてやか」と美的に評価しているのであるから、積極的にプラスに解釈すべきである。病に臥している柏木も、

白き衣どもの、なつかしうなよやかなるをあまた重ねて、
衾ひきかけて臥したまへり。 (柏木巻314頁)

と描写されていた。男女を問わず下着は白くて柔らかな装束と見てよさそうである(むしろ類型的でもある)。

ここまできて「なよ」系と「なつかし」の結びつきに気付いた(1)。前にあげた紫の上の用例(末摘花巻305頁)や中の君の用例(436頁)も含めて、これが親近感を増している要素であろう。他に『夜の寢覚』でも帝がまさこ君について、「いとつややかに、なつかしく、なよやかなる気はひ、手あたり」(夜の寢覚325頁)と、母寢覚の上を想起している。

また『堤中納言物語』中の『思はぬ方に泊りする少将』では姉君のことが、「薄色のなよやかなるが、いとしみ深う、なつかしきほどなるを」(思はぬ方に泊りする少将464頁)と描かれ

ている。「なよ」系は衣装の描写を超えて、その人の性質や様態とも重なることで、見る人に「なつかし」さと呼び起こす特殊な美的表現として用いられていた。そのためか藤壺や葵の上などの最上級の女性には用いられておらず、やや身分の低い女性の例が多い。紫の上にしても、成長した後は用いられていなかった。

まとめ

以上、「萎ゆ」及び「なよ」系の語について、用例の多い『源氏物語』を中心に検討してきた。本来的に「萎ゆ」は経済的不如意(マイナス)の象徴であり、継子苛め的な要素を内包している場合はその傾向が強かった。また垣間見場面では、本人の目線という以上に語り手の介入があり、「萎ゆ」が男性の救済願望を刺激することで、恋物語展開のキーワードとして機能していると読むこともできる。それに対して、経済的に豊かな人に用いられている例は、従来のように「着古して糊気が落ちている」と解釈するのではなく、もともと装束としてしなやかに作られた衣装であることを提起し、解釈の矛盾を解消し

てみた。その代表が男性の直衣や女性の下着であり、むしろ「萎え」ていること、つまり柔らかなことがプラス評価されている。

そうなると、強装束が使い古されることで糊気が取れて「萎ゆ」と称されているのか、もともと萎装束なので柔らかいのかを見極めることが重要になってくる。特に「萎ゆ」と語源が等しいとされる「なよ」系の語は、プラスの意味を担当している場合が多かった。さらに「なつかし」と結びつくことで、親しみやすさを表わす美的形容として、女流文学で新たな意味を付与されていることもわかった。紫の上や八宮一家の用例は、そのことを十分考慮した上で、その二重構造を見極める必要がありそうだ。

『源氏物語』は「萎ゆ」や「なよ」系の語を多用しただけでなく、従来とは異なる新たな用法を生み出し、それを物語展開の契機として活用していた。これまではその二重性を読み取れなかったために、解釈が混乱していたのである。

〔注〕

(1) 「源氏物語大成」の校異編で本文異同を調べてみたところ、

る、「なれたる」は青表紙の御物本・河内本となっていた。確かに「なれたる」でも良さそうである。ただし「萎」を「なれ」と読んだ例は他に見当たらない。

(2) 久保香珠氏「平安和文資料における「なよ」系派生語彙の語義比較―なよなよ・なよよか・なよらか・なよびか―」人文13・平成27年3月、細井富久子氏「なよびかについて―源氏物語を主として―」山陽学園短期大学紀要13・昭和50年11月参照。細井氏は「なよぶ」「なよびか」について、紫式部（『源氏物語』『紫式部日記』）によって初めて用いられた語であると述べておられる。

(3) 「萎ゆ」は上代の作品（『古事記』・『風土記』・『万葉集』）にも用例が認められるが、「なゆ」ではなく「しなゆ」と訓読されているので、今回の調査の対象には含まなかった。そのため明石巻の「しなえ」も除外している。

(4) 「なややか」は「うつほ物語」の一例のみしか見当たらないので、「なよよか」の誤写とされている。あるいは「住吉物語」の「なえらか」と同じく中世語であろうか。『角川古語大辞典』の「なよよか」項では、「なよらか」「なえよか」「なえやか」「なえらか」「なよやか」「なややか」

- か」などの語形がある」とコメントされている。また『日本国語大辞典』の「なよやか」項の語誌では、「なよらか」と「なよよか」に関しては、現存の写本では「なよらか」は僅かで、大部分がナヨヨカとある。「ら」と繰り返し記号の「ヽ」とは、誤写・誤認されて混同されやすいことを考慮すると、両語はもともと二語であったことが推測される。」と解説されている。それに対して久保氏は、「語の誕生の経緯はひとまず置いて、生み出されたあとについていえば、この二語は『源氏』や『寝覚』等ではある程度を使い分けが認められたから、別の二語と認定された程度と解釈される。」と分析しておられる(注(2) 参照)。
- (5) 五十嵐正貴氏「宇治十帖における〈瘦身と萎えた衣〉」『源氏物語の時空―王朝文学新論―』(笠間書院) 平成9年10月
- (6) 吉海直人「少納言の乳母」『源氏物語の乳母学』(世界思想社) 平成20年9月
- (7) 吉海直人「住吉物語」の「小桂」『住吉物語』の世界(新典社選書) 平成23年5月
- (8) 吉海直人「住吉物語」の「藤」と「桜」『住吉物語』の世界(新典社選書) 平成23年5月
- (9) 『源氏物語』における「萎えはむ」全9例の分布は、初音巻1例・野分巻1例・橋姫巻3例・宿木巻3例・東屋巻1例となっており、確かに宇治十帖に用例が偏っている。
- (10) 『蜻蛉日記』には「なりをうち見れば、いたうしほなえたり」(310頁) という「萎ゆ」の例がある。これは着古してよれよれになっているという意味なので、『蜻蛉日記』でも「萎ゆ」と「なよよか」が使い分けられていたことがわかる。
- (11) 「なつかし」の多様性は吉海直人「嗅覚の「なつかし」―『源氏物語』空蟬の例を起点として―」『日本文学論究71』平成24年3月(「なつかし」と結びつく香り)、『源氏物語』「後朝の別れ」を読む(笠間書院) 平成28年12月所収(参照。視覚・嗅覚以外に触覚の「なつかし」も認められそうである)。